

# 南風

みなみかぜ

寺報 第七号

平成二十五年 秋

〒543-0063 天王寺区茶臼山二-三十六

電話 〇六一六七七九-九四三五

〇六一六七九四-〇五八三

携帯 〇九〇-二〇四八-三二八九

真宗大谷派 松濤山 南照寺(なんしょうじ)

編集 発行 南照寺住職 友澤秀三

\*\*\*

さる十月五日の土曜日、本堂に於いて、「南照寺門徒集会」が開催されました。この十一月に倉島さんが東京へ御帰りになることを受けての集会とあつて、多数の御参加をいただき、ありがとうございます。さまざまのご意見をいただきましたが、詳細は「議事録」をこしらえていただきましたので、そちらを御高覧いただきますよう、よろしくお願いいたします。

\*\*\*

仲秋の候、寒暖の差が大きくなっています。いかがお過ごしでしょうか。

この十月十九日土曜日、「報恩講」が勤まりました。

これに先立ち、植木屋さんに剪定してもらい、いつもの仏具を全て「おみがき」して、さらに花瓶と鶴亀を別に出し、正面の阿弥陀如来像の前の卓はそれぞれ一對の「五具足」とするなど、今まで自分で仕切つてやったことのないことをさせていただきました。

いろいろと行き届かないところや、不細工で不手際な点多々あったかとは思いますが、私としては今後の法要の基準となるようにとの思いで、微力を尽くしました。

今後毎日々勉強してまいりますので、今回はどうかお目こぼしいただきたく存じます。

万障繰り合わせてご参列いただいた御門徒の方々には、この場をもつて厚く感謝いたします。

ありがとうございました。

近隣のお寺の方々もいろいろご心配くださつて、結局、天王寺警察前の「宗恩寺」さまが「役」をかって出てください、御出仕いただける運びとなりました。

おかげさまで無事、お勤め出来ましたことは非常にうれしく、誠にありがたいことだったなあ、良かったなあとの思いは日々強さを増してきております。

その後は南照寺住職による「法話」でした。お題は「報恩講が勤まるということ」です。

\*\*\*

「報恩講」とは、そのまま「恩に報いる法会」ということでしょう。「恩」は仏の恩なのでしようが、ここでは宗祖親鸞聖人の御命日であるところの十一月二十八日を念頭に置いて、お勤めするわけですから、やはり親鸞聖人の御一生「に」学んでいこうということが、一番大きな主題となるべきでしょう。

そのためにはとりあえず、親鸞聖人の御一生とはどのようなものであつたかを知らないといけませんので、通常『御伝鈔』という伝記を拝読いたします。

これはなかなかの長文であるのみならず、言葉もいわゆる「古文」ですから、パツと聞いただけで意味がすつと入る人は、今やほとんどおられないのではないかと思われまます。

むしろ解りやすいのは、『御絵伝』の掛け軸でしょう。これは『御伝鈔』に書かれてある、親鸞聖人の生涯にあつたさまざまな重要な場面、例えば得度や葬送茶毘の様子などが美しく彩色されて描かれてあります。残念ながら南照寺にはないのですが、一般には南余間に掛けて、

お寺によつてはそれを使つて「絵解き」をするところもあります。

まあ紙芝居のような感じを想像していただけたらと思います。ただそれぞれの場面の絵がちよつと小さくて見にくいですが。

\*\*\*

端的に言つて、「報恩講」とは親鸞聖人の御法事を勤めるということです。七百五十二回忌ということになります。真宗門徒はこれをずっと欠かさず大事に勤めてまいりました。

親鸞聖人といつても、「御開山」ではありませんが、あんまり自分とは深く関係していないよ  
うな認識をお持ちの方も、おられるのではないかと察します。「報恩講」はせいぜいお寺側の行事ではないかと。

ではあらためて、お寺つて何なんでしょう。また、法事とはどういうことなのでしょう。

まず「法事」について。これは仏法に会う、仏縁をいただく機会であるのはもちろんのことなのですが、「弔い」の一面を持つていることは否めないでしょう。つまり「葬儀」と質としては同じなわけです。例えば三回忌なら、葬儀が一回忌、一周忌が二回忌なので、二年目でも三回忌なわけです。

「葬儀」における「弔い」としての役割を見ていくと、先ずは

「なぜ、ほかでもない自分にとって一番大事な人が死んでしまつて、自分一人が生き残つてしまつたのだろう。」

という「死」の不条理に直面した時、「生き残つた人間とて、亡くなつた人に対してできることはある。それは弔うことだ。」

とその人に「仕事」を与えるということとです。「葬儀を行い得る者」としての立場が、「生き残つたこと」の理不尽さ、疚しきの説明となるわけです。

そして「弔い」が「喪の儀礼」としてあるためには、亡くなつた人間がどのような人生を送つてきたか、経歴や事情をそれぞれの人が語りあわねばなりません。それは故人を「物語」としてもう一度蘇らせることです。

お通夜の席や法事の折、さまざまに故人のエピソードが話題になるのですが、それが服喪者の「弔い」の仕事なのだ、と。

「御開山」というのは、道を開き示してくださった方だ、ということとです。

私たちは生きていくためにさまざまに工夫します。少しでもよりよい人生を願つて、「力」を振り回す。そのことが実は、本当の「願い」に背いているあり様なのだ、ということに照らし出してください。そんな風に言う、びつくりされてしまうこともあります。

生き馬の目を抜くような現代社会です。たとえそこで生きることの「プロ」であつたとしても、そのメソッドだけでは、死を前にした時に適切な判断が下せるかどうか、疑問です。そこには「死」は「敗北」と書かれているからです。

その「願い」を聞き、開く場が真宗寺院です。「願い」を書き記した「教え」を伝えてくださった方があつたから、それを聞こうと集まる人々が南照寺を建立したのです。

親鸞聖人と真宗門徒がいなければ、南照寺はありません。父と母がいなかつたら、自分は生まれていないことと構造は同じです。

御一生を物語ることが、同時に生死を超える「道」と「場」を明らかにしていく。それが今置かれている自らの姿を映し出す。「それでいいのか」との問いが聞こえてくる。南無阿弥陀仏が聞こえてくる。

それが、「報恩講」であります。

\*\*\*

次回 十一月十六日(土) 午後二時より  
「お勤めの会」 南照寺本堂に於いて